

# お花山古墳群

## 第3次発掘調査報告書

1987

日本道路公団仙台建設局  
山形県教育委員会

はな やま

# お花山古墳群

## 第3次発掘調査報告書

昭和62年

日本道路公団仙台建設局  
山形県教育委員会



25号墳



25号墳南側



25号墳北側

## 序

本報告書は、山形県教育委員会が、昭和61年度に実施した東北横断自動車道酒田線建設に伴う土取り工事にかかる「お花山古墳群」の緊急発掘調査の結果をまとめたものです。

本古墳群については、昭和57・58年度に、2ヶ年に亘り、山形県教育委員会が高速道路本線部分の発掘調査を実施し、すでにその成果は報告書にまとめ、刊行されています。先の調査では、本県の古墳時代を解き明かすうえで極めて重要な資料が得られました。ひとつには、24基を数える古墳群の在り方であり、またひとつにはそれらの古墳から出土した貴重な副葬品の数々です。中でも本県で出土例としては初めての「捩文鏡」や「乳文鏡」、さらには鉄劍や馬具、勾玉を始めとする華麗な装飾品・武具など、目を見張るものがあります。

今回の発掘調査は、この古墳群の位置する小丘陵「お花山」の南側部分について実施しました。新たに古墳1基の他、弥生時代の遺物も発見されました。先の調査の成果と併わせ、第3次調査の成果をまとめた本報告の果たす役割は大きなものがあると考えられます。

近年、埋蔵文化財と開発事業のかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には多くの問題があります。山形県教育委員会においては、生活文化の向上、地域環境づくりなど、「心広くたくましい県民の育成」という立場から、これらの間の調整を充分にかかり、今後とも埋蔵文化財保護のため努力を続けていく所存です。

終わりに、本調査にご協力いただきました関係各位並びに地元の方々に感謝申し上げますとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護・普及の一助となれば幸いです。

昭和62年3月

山形県教育委員会

教育長 小野 孝

## 例　　言

1 本書は、日本道路公団仙台建設局の委託を受け、山形県教育委員会が昭和61年度に実施した東北横断自動車道酒田線建設に伴う土取り工事にかかる「お花山古墳群」の発掘調査報告書である。

2 今回の発掘調査は本古墳群3次発掘調査である。第1次～3次調査は以下のとおりである。

　第1次調査 昭和57年8月23日～同年12月17日（延78日間）

　第2次調査 昭和58年4月12日～同年6月3日（延38日間）

　第3次調査 昭和61年4月21日～同年5月12日（延16日間）

なお、第1・2次調査については、「山形県埋蔵文化財調査報告書第85集 お花山古墳群発掘調査報告書」として刊行されている。

3 遺跡の所在地は、山形県山形市大字青野御花山である。山形県遺跡地図（昭和53年）には遺跡番号30番として登載されている。

4 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査）

佐藤 庄一（ 同 埋蔵文化財係長）

佐藤 正俊（ 同 主任技師）

現場主任 長橋 至（ 同 技師）

調査員 渡谷 孝雄（ 同 技師）

事務局 事務局長 後藤 茂彌（ 同 課長）

事務局長補佐 芝野 健三（ 同 課長補佐）

事務局員 長谷部恵子・中嶋 寛・氏家修一（同 主事）

5 発掘調査にあたっては、日本道路公団仙台建設局・同山形工事事務所、山形県土木部高速交通対策室、東南村山教育事務所、山形市教育委員会、山形市青野地区、飛島・清水建設株式会社共同企業体など、関係諸機関ならびに地元の協力が得られた。記して感謝申し上げる次第である。

6 本書の作成は、長橋至が担当・執筆・編集し、全体については佐々木洋治が総括した。

## 凡　　例

1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

SK：土壤 SD：溝跡 SX：性格不明遺構

2 検出された古墳は第1次調査からの継続番号で示した。なお、外部施設は検出されなかつたが、本来墳丘等の施設の存在が予測されるため、○号墳として扱かった。

3 報告書作成にあたっての基準は下記のとおりである。

(1) 掘図中の方位は磁北を示す。なお、グリッドY軸は東に17'傾く。

(2) 第3次調査のグリッドは、第1次・2次調査と共通である。

(3) 古墳主体部実測図は1/30、その他は、各々にスケールを示した。

(4) 古墳についての用語は次のものを使用した。

外部施設：周掘り、墳丘

内部施設：主体部、主体部掘り方、箱式石棺、割竹形木棺

4 遺跡の名称は、從来「御花山」・「お花山」の両者が用いられたが、本書では、「お花山」の名称を使用した。

5 25号墳出土の鉄製品のレントゲン透過は、山形県工業技術センターの協力を得て行なった。

## 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至るまでの経過	1
2 調査の方法と経過	1
II お花山古墳群の立地と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	4
III お花山古墳群の概観	
1 第1次・第2次調査の概要	6
2 第3次調査の概要	8
IV 遺構と遺物	
1 古 墳	10
2 古墳以外の遺構と遺物	13
V ま と め	17

## 挿 図 目 次

第1図 グリッド配図	2
第2図 お花山古墳群位置図・周辺の遺跡	5
第3図 検出された古墳分布図	9
第4図 25号墳出土鉄製品実測図	10
第5図 25号墳主体部実測図	11
第6図 SK1・SX2実測図	14
第7図 A地区遺構配置図	15
第8図 A地区出土土器拓影図	16

## 表 目 次

表-1 周辺の遺跡一覧	4
表-2 検出した古墳一覧	7

## 図 版 目 次

- 巻頭1 25号墳
- 巻頭2 25号墳
- 図版1 お花山近景（表土除去状況）・第3次調査鍵入式
- 図版2 A地区、C地区全景・B地区全景
- 図版3 25号墳検出状況
- 図版4 25号墳東側土層断面・25号墳実測風景
- 図版5 25号墳石棺内土層断面・25号墳北側土層断面
- 図版6 25号墳石棺内土層断面
- 図版7 25号墳北側礫配置状況・25号墳蓋石除去状況
- 図版8 25号墳蓋石除去状況
- 図版9 25号墳石棺南側礫・北側礫
- 図版10 25号墳鉄製品出土状況・25号墳石棺据え方完掘
- 図版11 A地区調査風景・S X 1, S X 2 プラン検出状況
- 図版12 S K 1 土層断面・S X 2 土層断面
- 図版13 S K 1, S X 2 完掘状況・S X 1 完掘状況
- 図版14 S X 3 土層断面・S X 3 完掘状況
- 図版15 S X 4 土層断面1・2
- 図版16 S X 6 土層断面・S X 6 完掘状況
- 図版17 出土遺物

# I 調査の経緯

## 1 調査に至るまでの経過

東北横断自動車道酒田線は、「国土開発幹線自動車道建設法」に基づく7,600kmに及ぶ高速自動車綱の一部として建設されるもので、宮城県仙台市を起点とし山形県酒田市に至る高速自動車国道である。そのうち山形県側では、山形～寒河江間で一部を除き着工しており、横断自動車道関連では次の遺跡が現在まで調査されている。1) 境田C遺跡(昭和56年)、2) 境田C'・D遺跡(昭和57年)、3) 物見台遺跡(昭和58～59年)、4) 達磨寺遺跡(昭和58～59年)、5) にひゃく寺遺跡(昭和59年)、6) 新山A遺跡(昭和61年)、そしてお花山古墳群第1次(昭和57年)、第2次(昭和58年)、従って、今回の本遺跡の調査は第3次調査となる。

第3次調査は、先に実施、報告されている第1・2次調査が、高速道本線部分にかかる緊急調査であるのに対し、本線建設に伴う土取り工事にその起因を有するものである。事業は、昭和60年度に具体化し、第1・2次調査対象地区の南側全域(約2,5000m<sup>2</sup>)が土取りの対象となった。これについて、山形県教育委員会では日本道路公団仙台建設局山形工事事務所と協議を重ね、昭和61年3月に対象地区的表土除去時に分布調査を実施した。その結果、同年4月21日から5月14日まで緊急調査を実施することとなったものである。

## 2 調査の方法と経過

調査は対象地区全域の表土除去時における分布調査の結果に基づき、大きく3地区を設定し実施した。A地区はお花山西側斜面15～31-21～-12グリッド(標高124～136m)、B地区はお花山南側斜面でやや尾根状を呈す区域54～69-10～-22グリッド(標高133～154m)、C地区はお花山中央部西側斜面最下方6～10-16～-24グリッド(標高119～123m)である。

土取り事業実施区域は、これらA～C地区を含む、グリッドY軸20以南の全域で、すべて、重機による表土除去後、古墳に限定せず、遺構の存在の有無を確認したうえで、遺構の検出された地区(A・C地区)、立地的に遺構の存在が予想される地区(B地区)、そして精査区を設定した。なお、グリッドは、第1・2次調査と共通である。

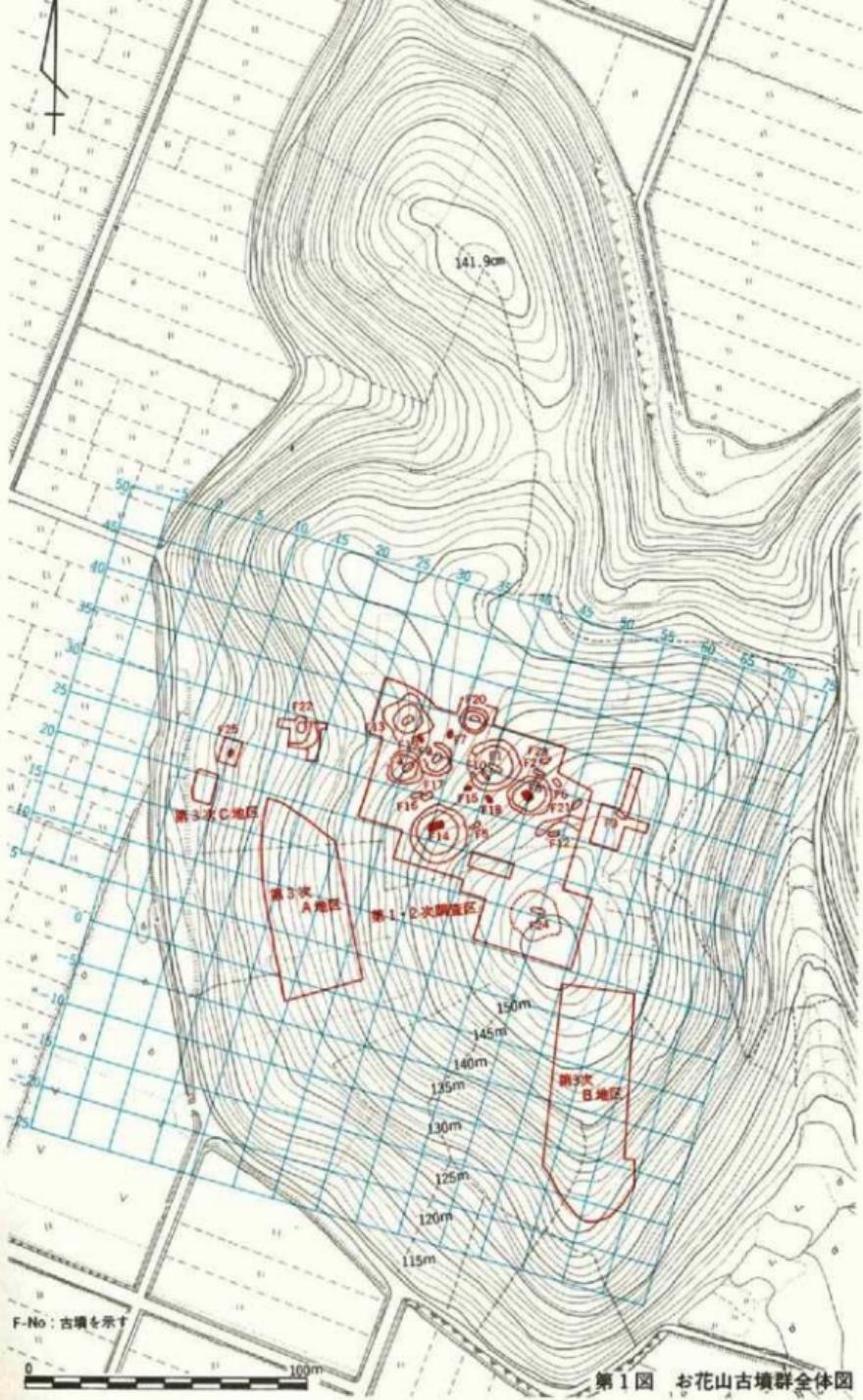
調査の経過は以下のとおりである。

4月21日～25日 機材搬入。鍵入式。A地区の面整理、並行して、C地区石棺(25号墳)の精査、一部実測に入る。A地区では弥生時代の土塙が検出される。

4月28日～5月2日 25号墳の精査・実測、A地区各遺構の精査・実測、撮影を行なう。

5月6日～9日 25号墳の実測、C地区の一部拡張、B地区面整理に入る。

5月12日～14日 25号墳石棺石材取り上げ。各地区実測終了。12日に現地説明会開催。14日、機材撤収、調査を終了する。



第1図 お花山古墳群全体図

## II お花山古墳群の立地と環境

### 1 地理的環境

山形市は、山形県の内陸部、山形盆地の南側に位置している。本遺跡は、山形市の北東部、奥羽山脈神室山系から延びる小丘陵上に立地する。この小丘陵は「お花山」の名称で呼ばれ、周辺の水田面との比高は約40m、山頂部の標高は156mを測る。丘陵は南北約520m、東西約240mで東側で山系と連なる。

山形市北部は、奥羽山脈を源とする立谷川、高瀬川が西流し、この両河川によって形成された複合扇状地と、やや南側から西流し亘山の麓で北北西に流路をかえる馬見ヶ崎川によって形成される扇状地がみられる。前者は二面以上の地形面となる開折扇状地であるのに対し後者は浅い流路が扇面に網状ないし、放射状を造るだけの形成途中にある扇状地であることが知られている。なお、馬見ヶ崎川による扇状地は、東から西に約130mの比高をもつ。この扇端部は明瞭ではなく、山形市霞城公園付近を南北に走る湧水地帯が一応、扇端と考えられている。このように、形成途中の扇状地のため、馬見ヶ崎川流域は氾濫の危険地帯で、しばしば河道が変わり、堤防構築後も近年まで欠濱溢流を繰り返している。

扇状地面の位置により、その状況は変化している。発掘調査の実施された山形西高敷地内遺跡と境田遺跡群での堆積の様子をみてみると、前者は縄文時代晚期から平安期に亘る複合遺跡で扇端部に位置する。ここは、縄文時代晚期から古墳時代にかけての生活面が砂礫層に覆われるなど、不安定な状態が続いたことを示す。これに対し、後者は弥生時代から平安期に亘る遺跡で扇状地前縁部に位置する。ここでは、縄文時代晚期以降、砂礫の堆積はみられず、比較的早い堆積速度を示すものの、安定した様相を呈するという。

「お花山」周辺は、東側が山地、西側が地形面区分による「下位面」となり、馬見ヶ崎流域（旧流路沿い）には周辺よりやや高まる自然堤防が所々にみられる。この自然堤防上には、第2図に示したように、弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代の集落跡が点在している。当然、弥生時代以降、生産基盤は稲作中心であり、これは、盆地内の河川の氾濫により、自然堤防下の湿地が冠水したことが推測され、適当の肥料分が供給されたものと考えられる。すなわち、弥生時代以降の水田經營による稲作を生活基盤とする社会にとっては好条件を備えた地域であったと考えられる。

しかし、現在までに、本古墳群成立の背景となった古墳時代の集落跡と考えられる遺跡、および、水田跡等の遺構は周辺地域では確認されていない。

## 2 歴史的環境

山形県の古墳をみた場合、その集中する地域は大きく3地域に分けることが可能である。すなわち、置賜盆地東北部（南陽市・高畠町）、同西部（川西町）、山形盆地南部（上山市～山形市）である。近年、本県の古墳については、古墳自体の研究、発掘例が増加しており、併行して同時期の集落跡の発掘・報告・研究も新たな動きをみせつつある。ここでは、全県的な古墳時代を中心とする歴史的環境は扱わず、とりあえず3地域のひとつで、本古墳群を含む山形盆地南半における状況を概観する。

山形盆地内での古墳の分布は、前報告でも触れたとおり、(1)盆地西側丘陵および傾斜変換線付近、(2)盆地中央平坦部、(3)盆地東側丘陵部および傾斜変換線付近の3地域に分けられる。これらについての詳細は前報告を参照されたい。

盆地内部での古墳の成立については、現在最も古いとされる西側丘陵の「菅沢2号墳」がその出土品から5世紀後半とされ、さらに「大之越古墳」が5世紀後葉とされている。本古墳群は第1次・2次調査により、最も古い時期で5世紀後半、新しい時期で6世紀末～7世紀初頭の時間幅で捉えられた。したがって、大之越古墳造営直後に本古墳群が成立しつつあることが考えられ、盆地西半と東半における往時の文化あるいは支配様相の一端がうかがえるとも言えよう。

このことは、最近問題になりつつある山形盆地における終末期古墳の年代想定との関係で一概に結論は出せないものの、現在、山形盆地における古墳の造営は5世紀中葉、5世紀末から6世紀代に古墳あるいは古墳群が展開し、7世紀代に群集墳が発展、7世紀末か8世紀初頭には終焉を迎えるといった様相が考えられる。

なお、以上は山形盆地内の動きであるが、当然、置賜地方あるいは宮城県・福島県との関連の中で山形盆地内の古墳の消長について論じることが必要であり、このことは、今後の大きな課題となる。

表-1 周辺の遺跡一覧

通号	周辺の古墳 跡名	古墳時代の墓葬跡	遺跡名		遺跡名
			番号	遺跡名	
1	花山古墳群	21 中野遺跡	29	坂田D遺跡（古墳・弥生・平安）	59 菊田遺跡
2	上道矢塚古墳	22 下桙人遺跡	30	西の古道跡	60 里見C遺跡
3	下道矢塚古墳	23 馬遺跡（古墳・良貝）	31	足尾遺跡	61 大物頭遺跡
4	火穴塚1号墳	24 阪場遺跡	32	小山遺跡	62 一本木B遺跡
5	火穴塚2号墳	25 箕ノ森遺跡	33	江戸原遺跡	63 一本木A遺跡
6	廢時古墳群	26 松原A・草木遺跡	奈良・平安時代の集落跡		64 下北C遺跡
7	廢守塚古墳群	27 川原田遺跡	44	坂波遺跡	65 宮町三小道跡
8	廢守塚2号墳	28 宮町町宅遺跡	45	中里B遺跡	66 岩出町五中道跡
9	廢守塚4号墳	29 飯原遺跡	46	村尾遺跡	67 山形町内遺跡
10	七浦2号墳	30 小白川山遺跡	47	入木遺跡	68 五日町遺跡
11	七浦古墳群	31 山形西山城内遺跡 (弥生・古墳・平安)	48	大久保遺跡	
12	風間古墳群	49 田原遺跡	奈良・平安時代の聚落跡		69 丸井戸糸屋
13	白山堂跡（古墳？）	50 連野寺2・3遺跡	51	連野寺3遺跡	70 長岡代糸屋
14	宮町古墳	52 重山遺跡	52	連野寺3遺跡	
15	風原古墳	53 井高尾遺跡	53	八幡山遺跡	
16	上の原古墳	54 北高上人遺跡	54	新井遺跡	
17	五日町古墳	55 春日堂遺跡	55	天神遺跡	
18	村西古墳	56 河阿賀遺跡	56	北上上・B遺跡	
19	高麗山古墳群	57 五反遺跡	57	千手寺・大門遺跡	
20	氷江遺跡	58 七崎・平野遺跡	58	銀原遺跡	



第2図 お花山古墳群位置図・周辺の遺跡

### III お花山古墳群の概観

#### 1 第1次・2次調査の概要

本古墳群については、大正4年に39基のマウンドの存在が確認され、一部発掘調査も実施されている。さらに、昭和25年の調査の報告ではマウンドは23基に減じており、その間に開墾等によるマウンドの削平がおこなわれたことが推測された。

この古墳群の存在する小丘陵「お花山」中央部を、最大幅100mで東北横断自動車道酒田線が走ることになり、山形県教育委員会は、日本道路公団仙台建設局山形工事事務所と協議を重ねた結果、昭和57年第1次、58年に第2次の緊急発掘調査を実施し、記録保存として対処することとした。2次に亘る調査の概要・成果を簡単にまとめるところとなる。

##### (1) 調査の方法等について

本古墳群は調査前の状況では、24号墳（山頂）以外、外観から墳丘の有無が推測される古墳はほとんどなかった。そのため、調査は対象地区の表土を全面除去し、その後、周掘り、主体部の土色の変化で遺構を検出、精査を進める方法をとった。

グリッド（第3次調査と共通）は、高速道センター杭Na468+40と同+60を結ぶ基準線をX軸、直交する方向にY軸をとり、3mグリッドを設定した。

##### (2) 調査の成果

2次に亘る調査で、高速道路線内において、24基の古墳が検出された（表-2）。第1次調査では、古墳の分布状況の把握、および検出した古墳のうち15基についての精査・記録をおこない、第2次調査ではさらに精査区の拡張と9基の古墳について精査・記録をおこなった。

検出された古墳は、山頂付近に3・24号墳、その他は山頂から北西方向に延びる尾根状の部分に大半が占地しており、この傾向は調査区外に存在すると考えられる古墳の在り方（お花山北半部）を予想させるものである。

24基の古墳は、主体部形態で①箱式石棺、②木棺直葬（いづれも竪穴式）、外部施設の状況で①周掘を有する。②周掘を有しない、に分類され、組み合わされている。また、出土遺物については、1・22号墳から本県初の「鏡」各1面（1号墳：変形捩文鏡、22号墳：乳文鏡）が出土し、その他、鉄製品、石製品、ガラス玉等の副葬品、周掘からは各古墳の時期を考察するうえでのひとつのメルクマールとなる土器も出土した。これらにより、本古墳群は、検出された24基については、その上限を5世紀後葉、下限を7世紀初頭として把握することができた。

表一2 検出した古墳一覧

	外 部 施 設		内 部 施 設			備 考		
	形 状	規 模 (m)	出 土 遺 物	主付部	範 模 (cm)	主軸 方 向		
1号墳 (1号棺)	円 墳	14.0×14.8	(周囲り)土師器4、 环2点、高环2、他	木棺直葬	(350)×70	N-53°-W	鏡1面、勾玉3、管玉11、 小玉534、櫛1、羽鍶革1、 リング1、鉄製品1	
1号墳 (10号棺)	—	—	—	木棺直葬	274×60	N-31°-W	鉄劍1、鉄釘1、刀子1	
2号墳	—	—	—	木棺直葬	290×52	N-56°-W	圓底器小口盤1、刀子1	
3号墳	(円墳) (15~25)	—	—	木棺直葬	210×70	N-47°-W	鉄鏡2面、刀子2、銅斧1、 銅鏡金具7、銅金具1、管 玉6、小玉13、磁石1	
4号墳	円 墳	10.12×9.32	(埴丘)土師器环2 (周囲り)高环环碎片1	木棺直葬	305×57	N-64°-E	(埴り方覆土)土師器环1、 (主体部)勾玉1、管玉4、 鏡2面4、東玉1、小玉21、 刀子片1	
5号墳	—	—	—	木棺直葬 (?)	—	N-81°-E	—	
6号墳	—	—	—	木棺直葬	280×95	N-14°-W	—	
7号墳	—	—	—	石 盒	215×82 (187×57)	N-29°-E	—	
8号墳	円 墳	12.4×11.2	(周囲り)土師器环2、 高环1、笠1	石 盒	213×56 (195×40)	N-34°-W	櫛残片1	
9号墳	円 墳	9.6×12.2	(周囲り)土師器环2	木棺直葬	294×65	N-58°-E	小玉15	
11号墳	—	—	—	石 盒	不 明	不 明	此石のみ残存	
12号墳	?	—	—	木棺直葬	245×53	N-88°-E	鉄鏡2面、刀子1、釘1	
13号墳	円 墳	10.40×9.85	(周囲り)土師器环3、笠1、 高环2、他	木棺直葬	385×130	N-65°-E	(主体部)刀子1 (埴り方覆土)笠片	
14号墳	円 墳	12.7×12.4	(周囲り)笠1、环1	石 盒	215×82 (187×57)	N-82°-W	—	
15号墳	—	—	—	石 盒	100×36 (88×24)	N-81°-E	—	
16号墳	—	—	—	木棺直葬	280×55	N-78°-E	櫛残片1	
17号墳	—	—	—	木棺直葬	323×90	N-78°-E	—	
18号墳	—	—	—	石 盒	220×72 (180×40)	N-34°-W	—	
19号墳	—	—	—	石 盒	211×70 (191×40)	N-42°-W	土師器环1	
20号墳	円 墳	7.85×7.20	(周囲り)土師器笠1	木棺直葬	246×56	N-67°-W	—	
21号墳	—	—	—	木棺直葬	295×55	N-55°-E	刀子1	
22号墳 (円墳)	(11.30m)	(周囲り)須恵器片1	木棺直葬	350×328	N-22°-E	鏡1面	主体部完掘・周囲 り1/4調査	
23号墳	—	—	—	木棺直葬	280×55	N-71°-E	(埴り方覆土)刀子1	
24号墳 (円墳)	19.60×15.86	—	木棺直葬	440×100	N-72°-W	鉄鏡2面、小刀1、刀子2、 馬具1	埴丘残存・周囲未 検出	
25号墳	—	—	—	石 盒	157×85 (132×53)	N-5°-E	刀子1	外部施設未検出

## 凡 例

外部施設の規模は主体部長軸方向×短軸方向(内法)の数値である。

内部施設主体部の規模は、木棺の場合は上場の数値。石棺の場合は上段が外法、下段( )内は内法の数値を示す。

主軸方向は、長軸方向のNから90°未満の度数を有する記載で、必ずしも頭部方向を基準としたものではない。

## 2 第3次調査の概要

今回の調査対象地区については、先の調査同様、調査前に墳丘が判明するものではなく、表土除去後に土色の変化によって検出してゆく方法となった。既述のとおり、対象地区（高速道本線の南側丘陵全域）の表土を昭和61年3月に全面剥いだ後、人力による面整理をおこない、A～C地区の精査区を設定した。各地区の概要は以下のとおりである。

### A地区（お花山西側斜面15～31-21～-12グリッド、標高124～136m）

第2次調査で検出した22号墳とほぼ同じ標高を測る地区で、22-3グリッド付近が現況で若干フラットになっており、さらに、全体に傾斜がやや緩やかとなる区域である。22-3グリッドのフラット面の状況は22号墳検出前と類似しており、この地点での古墳の存在が予想された。

調査の結果、A地区では6基の遺構が確認された。古墳時代の遺構は検出されず、弥生時代の土壙1基、性格不明遺構1基、ロームマウンド2基、近～現代の擾乱による落ち込み2基である。上記のフラット面では、その周辺も含め、遺構は未検出であった。

### B地区（お花山南側斜面54～69-10～-22グリッド、標高133～154m）

24号墳の位置する山頂から南側へ尾根状に延びる区域である。古墳存在の位置的条件が満たされる地形を呈すると考えられた。

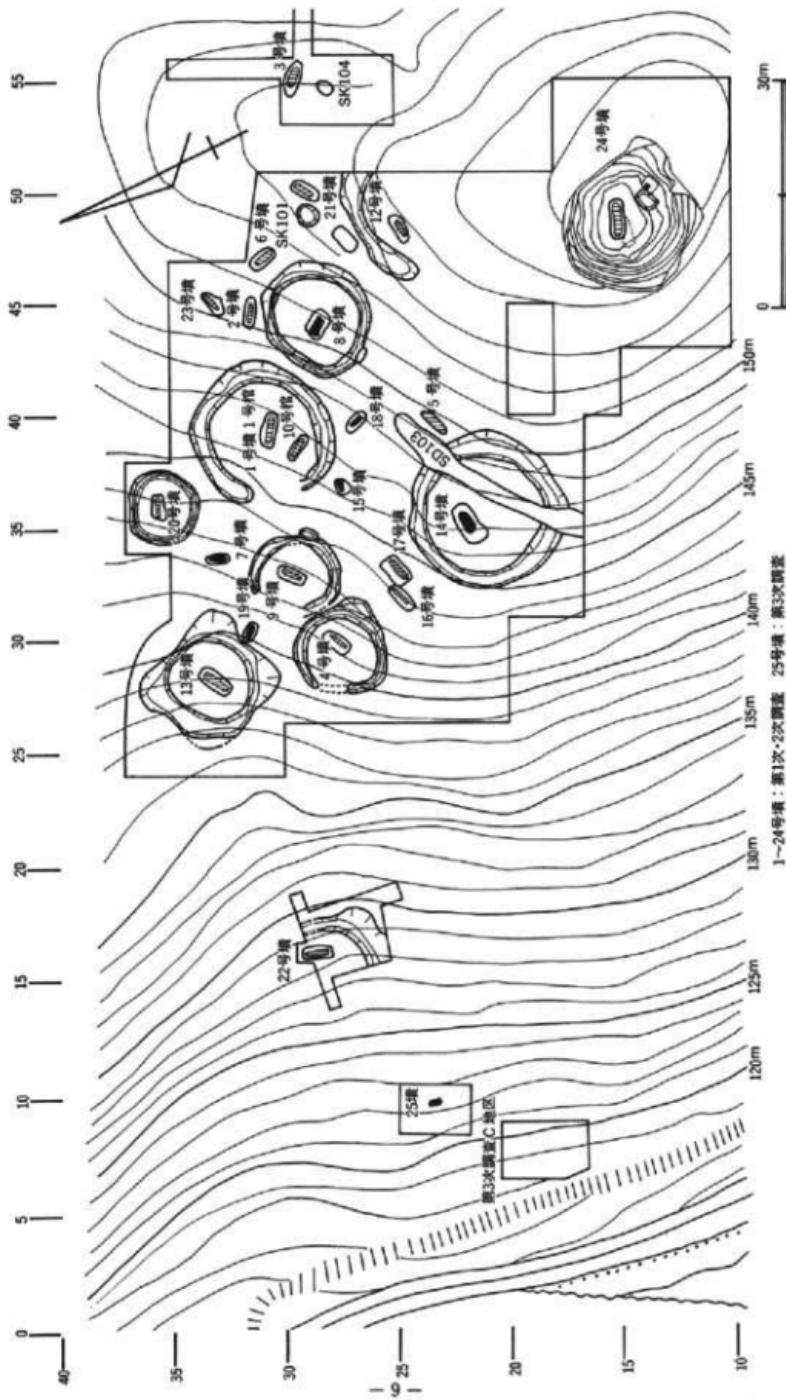
調査はこの尾根全面について面整理を実施した。その結果、B地区全域は表土直下が比較的堅い軟岩層となっており、山頂及び第1次・2次調査区とは全く異なる土質であることが明らかとなった。軟岩層は、古墳主体部を竪穴式に構築するには不向きである。したがってB地区においては、古墳あるいはそれ以外の遺構等は全く検出されなかった。恐らく、地形的には古墳の占地には適するものの、この軟岩層により立地的に古墳構築はできなかつたものと推測される。

### C地区（お花山中央部西側斜面下方6～10-16～24グリッド、標高119～123m）

土取りに伴う撤路構築のための削平時に石棺を検出したため精査区とした。その後、聞き込みにより、石棺の南側にマウンドが過去に存在したことにより一部拡張してその有無を調べた。結果的には最初検出された石棺（25号墳）のみが確認されたにとどまる。石棺周辺は、削平によりかなり土が移動しており、主体部掘り方等はごく一部で確認されただけである。

その他、お花山南西斜面（15～29-5～-20グリッド）についても表土除去後、面整理を実施したが、遺構は全く検出されなかった。

さらに、A～C地区以外の全域について遺構の有無を調べたが、A・C地区以外では全く確認されなかったことを付記する。



第3図 検出された古墳分布図

## IV 遺構と遺物

### 1 古 墳

今次調査で検出された古墳は1基である（C地区）。第1次・2次調査からの継続で「25号墳」とした。

#### 25号墳（第5図）

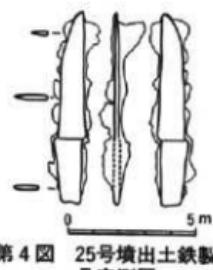
**位置** お花山西側斜面最下方、9-22～23グリッドに位置する。北東25mで22号墳と近接する。

**墳丘と外部施設** 調査前の段階では墳丘は全く認められなかった。また、周掘りについても、石棺周囲の拡張、精査をおこなったが検出されなかった。

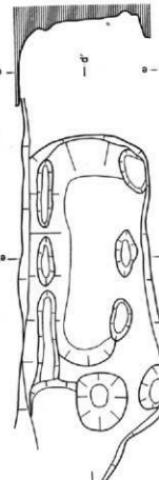
**主体部** 主軸方向はN-5°-Eを測る。主体部の施設は石棺で、中央部～北側部分で盜掘を受けている。工事用道路設置のための掘削時に石棺蓋石の一部が現われたため、直ちに精査に入ったものである。表土から蓋石までは斜面上方の東側で60～70cm、西側で20～30cmと浅く、主体部掘り方は東側セクションa-a'ラインの他では確認できなかった。

石棺の規模は、長軸内法が底部で132cm・外法が最大で157cm、短軸内法が底部（最大）で53cm、外法がc-c'ラインで85cmを測る。石棺蓋石は検出時に中央部が開口していた。状況から推測して石材番号（第5図）3・7は原位置と考えられるが、本来蓋石とみられる1・5・6が石棺東側に、8・10が北側に移動していた。その他、石棺北側1mの範囲に石材が散乱しており、すべて盜掘時によるものかあるいは石棺構築時に置かれたものか不明である。側石はいづれも原位置をとどめており、基本的には東西とも2重の側石となる。側石は40cm×(10～15cm)×(20～30cm)の偏平の礫（一部加工したものも含む）を使用し、若干の据え方を掘り込み配置している。東側7枚、西側9枚で構成され、隙間に小形の礫を充填し、さらに黒褐色粘土で目張りをしている。目張りは東側で顕著である。石棺両端は、南側が2重、北側が1枚で構成されている。底面は底石ではなく、地山の粘土層を直接床面としている。床面及び石棺内部から白色粘土塊は検出されなかった。

**出土遺物** 石棺内部からの遺物の出土はない。東側石27・29間、据え方の地山直上面から鉄製品1点が出土した（右図）。全体に錆が著しい。X線透過によると「刀子」とみられる（図中太美線）。全身は74mm、刃～背幅11mm（関付近）で、柄はの材質は不明である。（X線透過は山形県工業技術センターの協力による。）



第4図 25号墳出土鉄製品実測図

 $d = 121.40m$ 石炭岩鉱層図  
炭質灰岩鉱層図 $d = 121.40m$ 石炭岩鉱層図  
炭質灰岩鉱層図

1 暗色シルト (小礫を含む、しまりがくわ)  
2 明色シルト (小礫を含む、しまりがくわ)  
3 黄褐色土 (しまりがくわ、けいがい、礫を含む)

岩相變遷図 (25号検査測定)

a 黄褐色土 (しまりがくわ)  
b 暗色シルト (121.40m)  
c 黄褐色土 (しまりがくわ、けいがい)  
d 黄褐色土 (しまりがくわ、けいがい)  
e 黄褐色土 (しまりがくわ、けいがい)

(121.40m) 小鉆孔  
(鉱石採取測定)



ガラス

1 暗色シルト (大礫を含む、しまりがくわ、けいがい)

2 明色シルト (小鉆孔を含む、しまりがくわ、けいがい)

3 黄褐色土 (小鉆孔を含む)

風化帶土 (しまりがくわ)

(1) 黄褐色土 (しまりがくわ)  
(2) 黄褐色土 (しまりがくわ)

岩相變遷図

1 暗色シルト (121.40m)  
2 明色シルト (121.40m)  
3 黄褐色土 (121.40m)

岩相變遷図 (25号検査測定)

a 黄褐色土 (しまりがくわ)  
b 暗色シルト (121.40m)  
c 黄褐色土 (しまりがくわ、けいがい)  
d 黄褐色土 (しまりがくわ、けいがい)  
e 黄褐色土 (しまりがくわ、けいがい)

(121.40m) 小鉆孔  
(鉱石採取測定)



ガラス

1 暗色シルト (121.40m)  
2 明色シルト (121.40m)  
3 黄褐色土 (121.40m)

風化帶土 (121.40m)

(1) 黄褐色土 (しまりがくわ)  
(2) 黄褐色土 (しまりがくわ)

岩相變遷図

## 2 古墳以外の遺構と遺物

今回の調査ではA地区で古墳以外の遺構が検出された。弥生時代の所産と考えられる土壙1基、弥生土器片を出土したロームマウンド2基、性格不明落込み1基の他、近・現代の攪乱による落込み2基である。

S K 1 23~24-10~11グリッドに位置し、S X 2と重複する。新旧関係はセクションの観察から旧S X 2→新S K 1となる。規模は平面で長軸210cm、短軸173cmの不整橢円形を呈する。底面は凹凸が少なく斜面に対して土壙底面が水平に近くなるよう掘り込まれているものの、比高は12cm程度で東側が高い。壁はやや緩やかに立ちあがる。

遺物は1点出土した(第8図1)。甕口縁部資料で色調は灰黄褐色(10YR4/2)である。表面には部分的に炭化物の付着がみられる。口縁部らやや外反しながら立ちあがる。文様は半截竹管状の施文具で2本同時に平行沈線文が描出される。本資料は横方向に、口縁部に3段、頸部に2段、体部上端に1段(現存部分のみ)の平行線がみられる。平行線の幅は内々で2.2mmを測る。

S X 2 23~24-10~12グリッドに位置し、S K 1と重複する。等高線沿いに南北に長い溝状の遺構である。規模は長軸で535cm、短軸で125cmを測る。底面は斜面上方(東側)でやや深く掘り込まれているものの、西側が低く、比高は30~40cmとなる。小さい凹凸はあるものの全体に平坦である。遺物は2点(第8図3・4)出土した。S X 3・4出土の2・5と同一個体と考えられる。

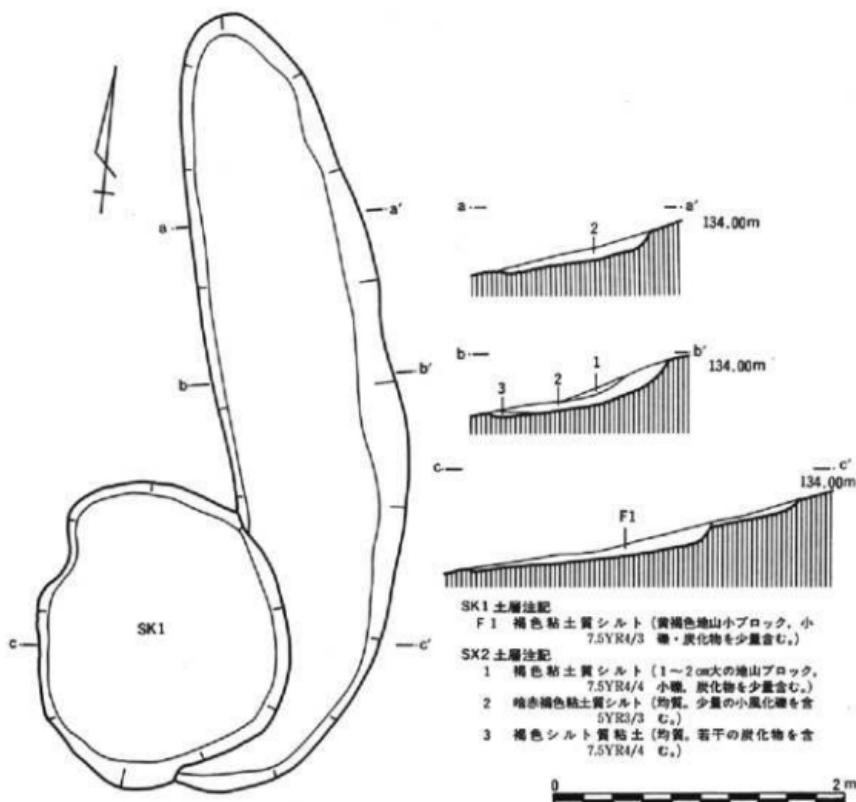
S X 3 21~22-10~11グリッドに位置する。平面形は北側がやや膨らむ隅丸長方形で、長軸方向285cm、短軸方向195cmを測る。本遺構は、精査を進める中でロームマウンドの可能性のあることが判明した。

遺物は4点出土した(第8図2・4・6・7)。2・3・4・5は胎土、施文、内面の調整法から接合はしないが同一個体と考えられる。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈する深鉢と考えられる。口唇部には外面に斜方向、内面には2条のL字の側面圧痕がみられ、口縁部以下には同じくL字の撓糸圧痕が縦位に施文される。繩文施文後、口縁部にやや先の丸い棒状工具で2本の沈線が横走している。6は壺の頸部付近の資料とみられ、半截竹管状の施文具で2本同時に平行沈線を施している。幅は内々で1.3mmを測り、横走する平行沈線と波状の平行沈線が組み合わされている。色調は淡黄色(2.5Y8/3)を呈する。7は壺体部下半資料と考えらる。平行沈線・沈線による文様が描出され、下方に附加条繩文が施される。

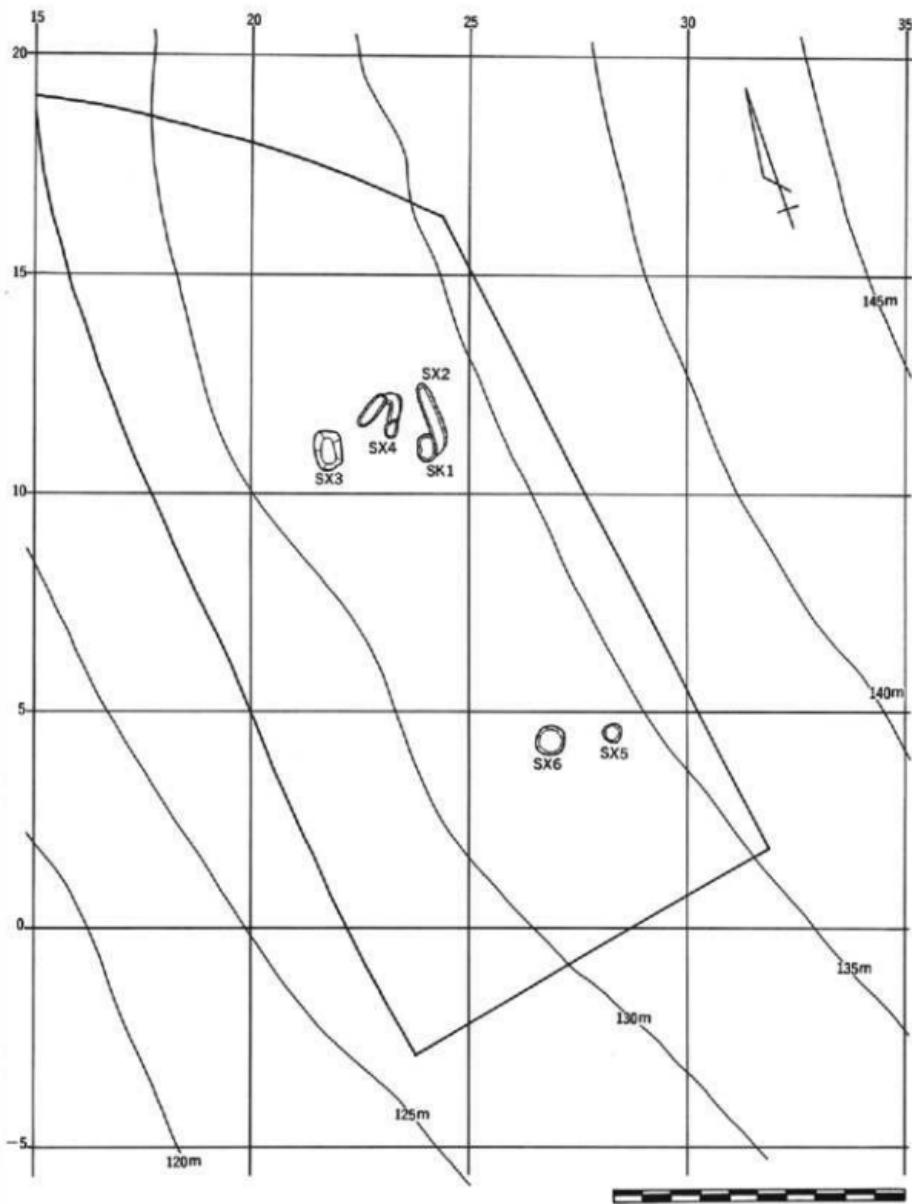
S X 4 22~23-11~12グリッドに位置するロームマウンドである。4点の遺物が出土した(第8図8~11)。8は壺頸部資料で、くびれ部に2段、平行線がみられる。縦位にも

施文されているようだが証然としない。平行沈線の幅は内々で1.5mm、色調は灰黄褐色(10 Y R 4/2)を呈する。9は壺体部上半～頸部資料と考えられ、平行沈線による同心円が描出される。平行沈線の幅は内々で2.5mm、色調は明黄褐色(10 Y R 6/6)を呈する。10は壺体部上半資料で平行沈線による同心円が描出される。平行沈線の幅は2.6mm、色調は明黄褐色(10 Y R 6/6)を呈する。11は壺もしくは壺の体部資料と考えられ、平行沈線による山形状の文様が施文される。平行沈線の幅は内々で2.9mm、色調は9・10と同じである。

S X 5・6は擾乱のため割愛する。その他、B地区で須恵器坏口縁部資料・A地区で頁岩のフレイクが1点出土した。



第6図 SK1・SX2実測図



第7図 A地区遺構配置図



1 (SK1)



2 (SK3)



3 (SX2)



4 (SX2-SX3)



5 (SX4)



6 (SX3)



7 (SX3)



8 (SX4)



9 (SX4)



10 (SX4)



11 (SX4)



第8図 A地区出土土器拓影図

## V まとめ

今回の調査では、古墳1基と弥生時代の遺構と遺物が若干検出された。

### (1) 古墳について

第1次～3次調査を通じて計25基の古墳（主体部）が検出された。大正年間に、39基の墳丘がお花山全体で確認されていることを考えれば、調査区以外の地区にさらに14基以上の古墳の存在が予想される。第1～3次の調査は、小丘陵お花山の南半部分について実施したことになる。その結果、古墳は、山頂部から北へ延びる尾根の西側、つまり山頂から北西方向に集中して配置されていることが明らかとなった。さらに、山頂部から南側については全く存在しないことも明らかとなった。したがって、未確認の古墳は今回土取り工事にかかる丘陵北側、しかも、1～24号墳（22号墳を除く）の分布する区域の北東部から丘陵中央部のフラットな面までの区域および、丘陵北側の標高141.9mのフラット面部分に存在することが考えられる。

1～25号墳の構築された時期については、先の報告で、出土遺物から本古墳群成立を5世紀後葉、終末を7世紀前葉とした。このことについてはその後の研究・報文等によりその終末を6世紀代とする見解もあり、今後の研究に依るところが大きい。

また、県内の古墳については、昭和61年に山形市菅沢2号墳の再調査、さらには置賜地方における新たな古墳の発見・調査研究が始められており、また、県内古墳の集大成も現在進められている状況で、今後、その研究は新しい展開を迎えるとしている。

### (2) 古墳以外の遺構と遺物について

お花山は古くから弥生時代の遺物が出土する遺跡としても知られている。第1次・2次調査においても、土壙1基と少量の土器が出土した。時期的には弥生時代中期末葉の広義の「桜井式」のなかで把えられる土器群と弥生時代後期の広義の「天王山式」に属する土器群である。今回、出土した遺物もやはり同時期のものだが、ロームマウンド出土のものが多く、明確に遺構と関連するものは少ない。第8図に示した1～11のうち2～5は出土地点が異なるものの同一個体と考えられ天王山式、他は桜井式の中で把えられる土器群であろう。

以上、事実報告で本報告のまとめとする。本古墳群については、その年代・分布・山形盆地でのあり方等、既報しているため、重複を避ける意味で考察等には触れていない。また、近年、古墳時代の集落跡の発掘調査例も増加しつつあり、その中で、特に本県における土師器の研究も進展しつつある。したがって、これらとの関連で本古墳群をとらえ、古墳の成立と発展、終焉を総合的に研究することが今後の課題となろう。

## 引用・参考文献

- 1950 川崎道良「村山地方の古墳」『羽陽文化第1巻4号』
- 〃 〃 「お花山に立ちて」『羽陽文化第1巻5号』
- 1953 柏倉亮吉「山形県の古墳」山形県文化財調査報告第4編 山形県教育委員会
- 1964 伊東信雄・伊藤玄三「会津大島の古墳」会津若松史跡研究会 会津若松史跡委員会
- 〃 「福島県史 第6巻」福島県
- 〃 「鳴跡跡」山形県教育委員会
- 1968 竹島国基「高見町第1号墳、与太郎内第1号墳調査概要」『原町市史』原町市
- 〃 「東京国立博物館古墳目録古墳遺物編『北海道・東北』」東京国立博物館
- 1969 『我孫子古墳群』東京大学文学部考古学研究会 我孫子市教育委員会
- 〃 「山形県史 考古資料 資料篇II」山形県
- 1971 「山形盆地における先史古墳の様相―東北平原古墳の発掘調査を中心として―」『山形史学研究第7号』
- 1972 伊藤 忍「山形市上石町出土の石棺」『さあい第4号』
- 1973 加藤 錠「巣川流域における古墳文化の展開」『巣川流域の歴史と文化』工藤定雄教授退職記念会編
- 〃 「山形市史 上巻」山形市
- 1974 佐々木茂哉他「岩切鴻ノ森遺跡」『東北新幹線開通跡調査報告書』宮城県文化財調査報告書第35集 宮城県教育委員会
- 〃 「裏町古墳群」阿山郡山陽町教育委員会
- 1975 「用木古墳群」阿山郡山陽町教育委員会
- 1978 「史跡高見町古墳昭和52年度発掘調査概要」名取市文化財調査報告書第5集 名取市教育委員会
- 〃 「上述失塚古墳調査報告書」天童市史別巻上 地理・考古編 天童市
- 1979 川崎利夫「山形県における土師器縄耳年式試験」『庄内考古学第16号』
- 〃 「山形盆地における古墳の成立と展開―地方における古墳の形成と展開―」『山形考古第3巻第2号』
- 〃 「東北新幹線開通跡調査報告書I」宮城県文化財調査報告書第35集 宮城県教育委員会
- 〃 生江芳徳・寺島文雄「福島県浪江町加倉古墳群」浪江町教育委員会
- 〃 川崎利夫・野尻 侃「大ノア古墳発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第18集 山形県教育委員会
- 1980 川崎利夫「古墳時代の庄内地」『庄内考古学第17号』
- 〃 佐藤庄一他「熊野町遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第31集 山形県教育委員会
- 〃 「東北新幹線開通跡調査報告書II」宮城県文化財調査報告書第65集 宮城県教育委員会
- 〃 「東北新幹線開通跡調査報告書IV」宮城県文化財調査報告書第72集 宮城県教育委員会
- 〃 小野 忍「山形県における古式須恵器の様相」『庄内考古学第17号』
- 〃 大越道正他「佐平林遺跡跡区」「母知地区遺跡発掘調査報告書V」福島県文化財調査報告書第85集 福島県教育委員会・時照島県文化センター
- 1981 田中則和・仙台市大野田六反田遺跡発掘調査報告書 仙台市文化財調査報告書第44集 仙台市教育委員会
- 〃 「阿賀一里鳥糞天宋村における古墳時代瓦窯跡の調査―」福島県岩瀬郡天宋村教育委員会
- 〃 「金持田村古墳」田村古墳古墳調査報告刊行会
- 〃 中村 浩「象泉陶色の研究―須恵器生産の基礎的研究の一―」柏書房
- 1982・1983・1984 「福島県双葉郡浜川町本郷敷古墳群発掘調査報告書」1・2・3 法政大学文学部考古学研究室
- 1982 川崎利夫「磐梯地方の古墳―方形周溝墓と大型古墳を中心として―」『まんざり創刊号』まんざり企画
- 〃 「磐梯跡 磐梯式土師器様式遺跡調査報告」仙台市文化財調査報告書第43集 仙台市教育委員会
- 〃 「宮城県仙台市鶴ノ巣遺跡一発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第44集 仙台市教育委員会
- 〃 「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第35集 仙台市教育委員会
- 〃 「山形県史第一巻 原始・古代・中世編」山形県
- 〃 「新幹線と道路」東北歴史資料館
- 1983 「埼玉県における古墳出土遺物の研究―鉄器について―」埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究記要
- 〃 「奥原古墳群」群馬県教育委員会・筑波馬場遺跡文化財調査事業団
- 1984 藤田寅宣・阿子島功「天神森古墳一川西町堀藏文化財調査報告書第6集」川西町教育委員会
- 〃 柏倉亮吉「山形県川西町天神森古墳」川西町埋蔵文化財調査報告書第6集 川西町教育委員会
- 〃 「度谷古墳」『ふるさと考古資料』II いわき市文化財事務室
- 〃 「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第68集 仙台市教育委員会
- 〃 「宮城の研究 第1巻 考古学編」清文堂
- 1985 長崎重一・佐藤正俊・佐藤孝志「お花山古墳発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第85集 山形県教育委員会
- 1985 「本量敷古墳群の研究」法政大学文学部考古学研究室
- 1986 「山形考古学会第2回研究大会レジュメ」
- 1986 阿部明彦「物見合跡発掘調査報告書(1)」山形県埋蔵文化財調査報告書第106集 山形県教育委員会

## 図 版



お花山近景（表土除去状況）



第3次調査観入式



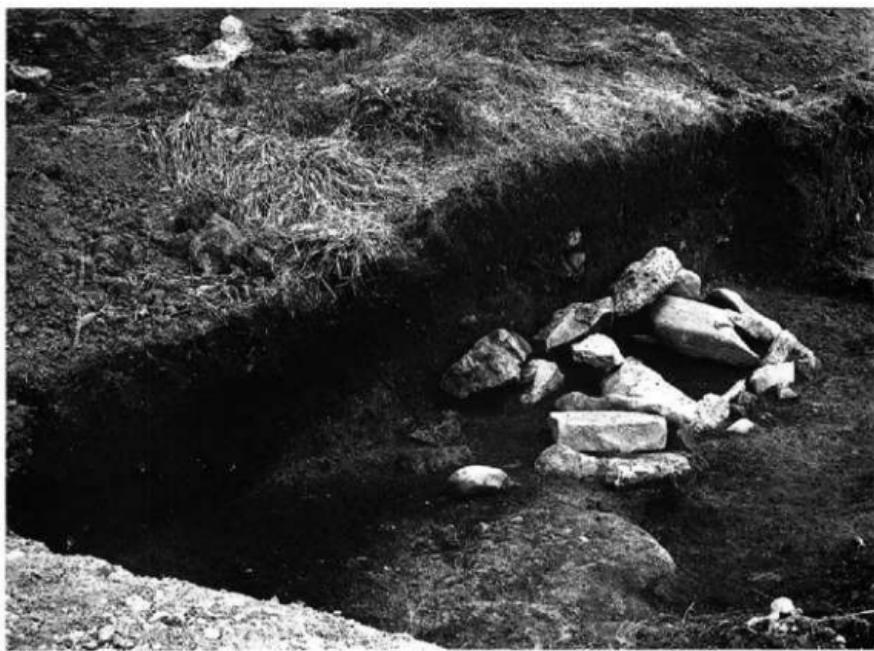
A地区・C地区全景（西から）



B地区全景（南から）



25号墳検出状況



25号墳検出状況



25号墳東側土層断面



25号墳実測風景



25号墳石棺内土層断面



25号墳北側土層断面



25号石棺内土层断面（北侧）



25号石棺内土层断面（中央）



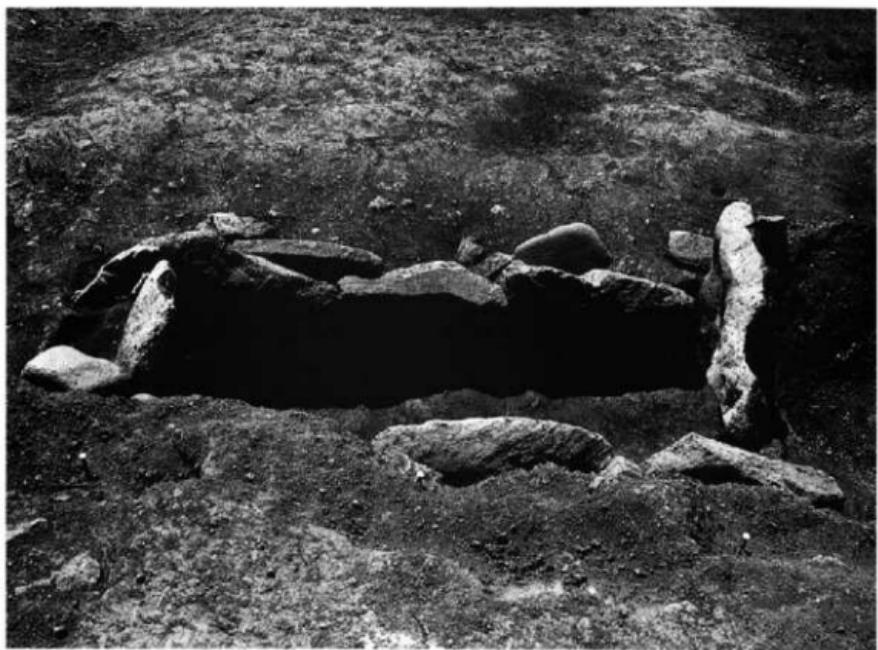
25号墳北側石配置状況



25号墳蓋石除去状況（南から）



25号墳蓋石除去状況（西から）



25号墳蓋石除去状況（東から）



25号墳石棺南側壁（北から）



25号墳石棺北側壁（南から）



25号墳鐵製品出土状況



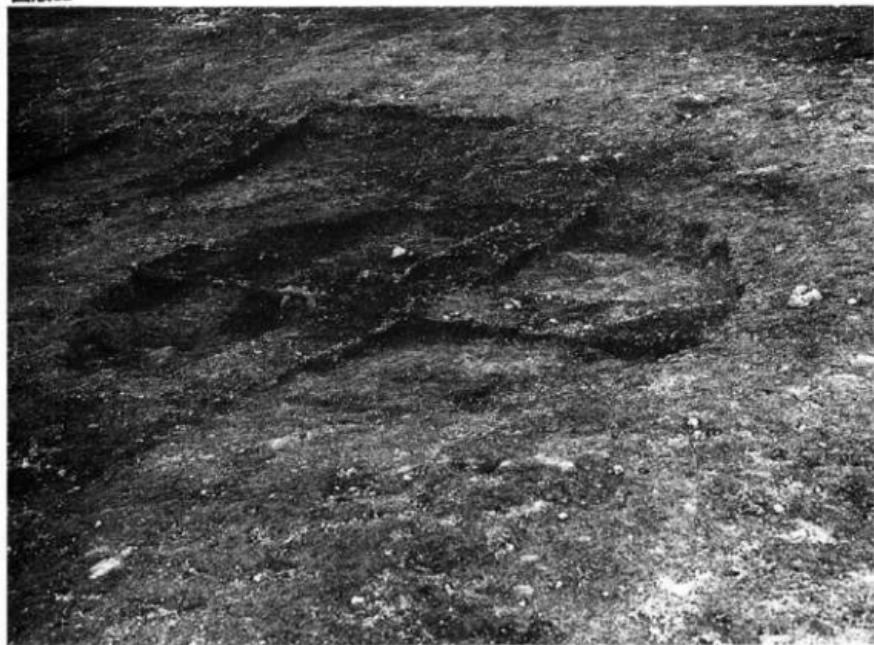
25号墳石棺据え方完掘（北から）



A地区調査風景



SK1・SK2 プラン検出状況



SK1 土層断面



SX2 土層断面



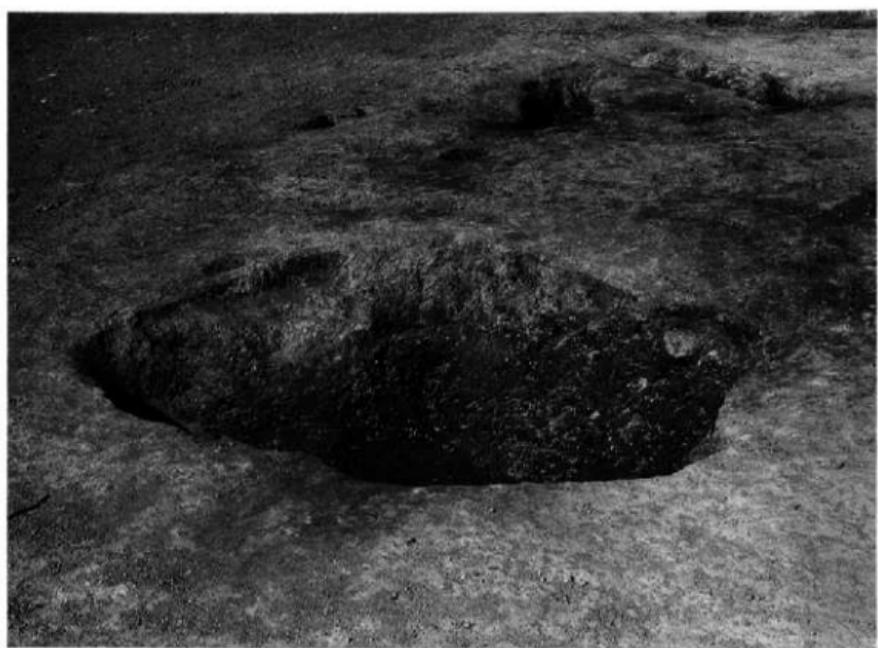
SK1・SK2 完掘状況



SK1 完掘状況



SX3 土层断面



SX3 完掘状况



SX4 土層断面 1



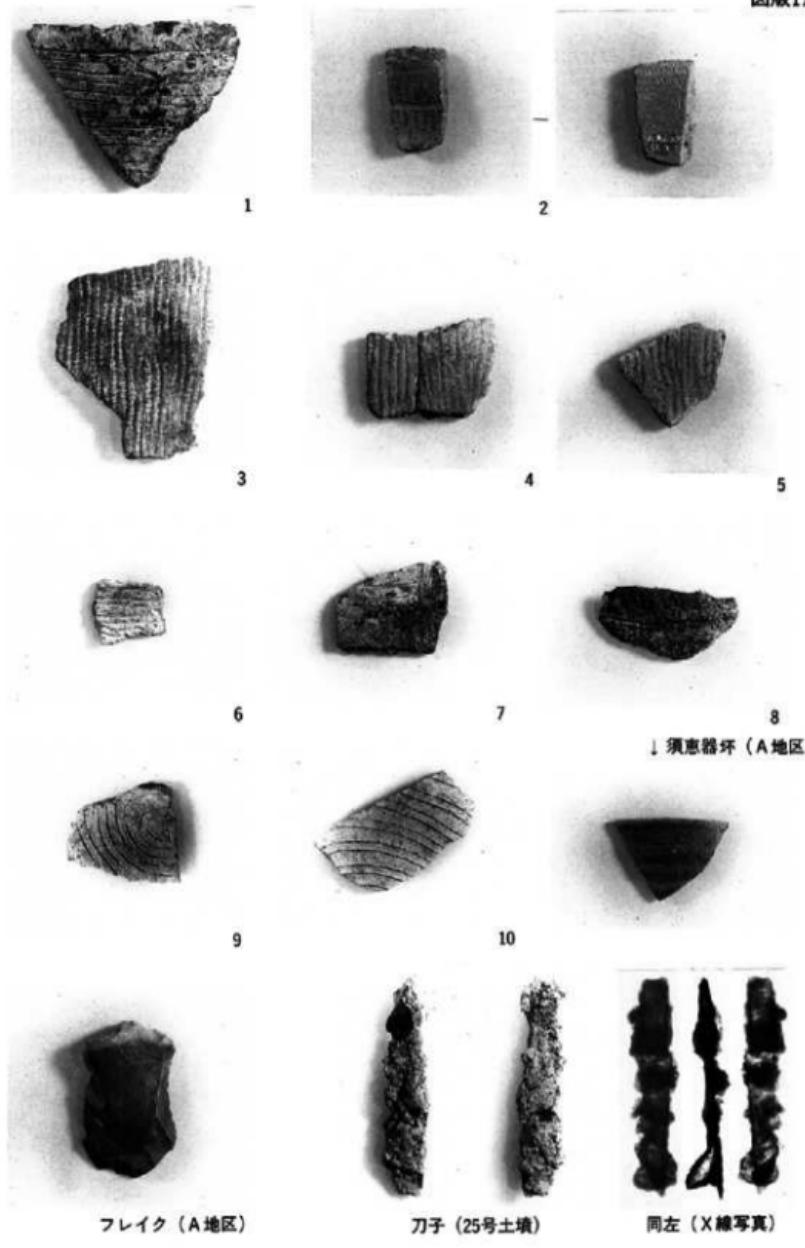
SX4 土層断面 2



SX6 土層断面



SX6 完掘状況



\*番号は第8図と対応

出土遺物 (S=1/2)

山形県埋蔵文化財調査報告書第108集

お花山古墳群  
第3次発掘調査報告書

昭和62年3月10日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 株式会社大風印刷